

れるのであるが、これと反對に抑制さるべき何らの反對表象がないならばそこに暗示の要素が存在し得ない。この點から見ると、暗示は反對の衝動を克服して或る行動に向はしめる命令であると定義することが出来る。それ故最も完全な服従の状態は吾人の自然に有する被暗示性が他人から與へられる暗示と一致して活らく場合で、特に希望や恐怖の如き情緒の變化を起す状態に於てそれが見られる。

二 摸倣および同情 摸倣は服従の一種であつて、言語による暗示以前すでに嬰兒期に於て重要な活らきをなすものである。嬰兒に於ては運動の刺激と印象とが結合されると同時に不隨意的に摸倣が起る。運動に對する印象と運動を起す衝動とが結合されるのは表象聯合によるのである。嬰兒は心的要求から笑ふこともあるが摸倣によつてもまた笑ふのである。しかしかかる不隨意的摸倣よりも更に重要なのは言語による摸倣である。否言語は摸倣によつて獲得されるものであり、成長すると共にその他の能力もまた摸倣によつて收得されるのである。始めの中はこの摸倣は單に自動的であるが次第に隨意的になつてくる。この不隨意的摸倣が社會的體制に

於て最も重要な道具となるのである。

摸倣と暗示の關係は極めて密接であつて、被暗示性が増すと共に摸倣がたやすくなる。暴動の如き場合には群集は被暗示性が鋭くなつてゐて、各個人は隣にゐるものすることを自動的に反覆する。軍隊の場合に於ても熱情乃至恐怖のために、全兵卒は摸倣的な衝動によつて或ひは戦ひ或ひは逃げるのである。そしてかかる摸倣的な反應は常に勢力を放散させるものである。例へば他人が重いものを持ち上げたのを見て、振ひ立つて自分も持ち上げようとする如きである。

しかし吾人が行動に對する衝動を感じるときには情緒に新しき變化を起すものである。即ち摸倣的の行爲は感情の内面的摸倣を伴ふ。母親の笑ふのを真似て笑ふ子供は母親の愉快な感情をも受け入れるのである。また他人の怪我を見ると痛さが眼にしみるものである。かかる摸倣的な感情が發達すると、同情心によつて支配されるやうになる。その内容が極めて豊かになる場合は利他的感情となり、種々の博愛事業の心的動機となる。かくして他人の感情に從屬することは、女に見る如き優しさ



の感情や、親の愛の如きものとなる。親の愛は子供の感情を支配するものであるが、本能的には子供の感情によつて支配されそれに従属するのである。かるが故に親は子供の犠牲たらんとし、子供は親に服従せんとするのである。社會的集團に於てはかかる感情の從屬關係が極めて重大な役目をなしてゐる。

三 攻撃および自己表現 服従する能力と同様に有力なのは自己を肯定し主張する欲望である。自己表現はもとより他人との接觸を前提とする。自己主張に於ける中心的な活らきは他の干渉を排けることである。これは嬰兒が服従に反對する場合と同様であつて、自己の本能的衝動を實現するに妨げとなるものを除く努力である。しかし自己の意志を他人に強ひようとする努力は、單に争闘にのみ基くものではない。それは自己表現に對する欲望を基礎としてゐる。社會に於て吾人は認められようとすゝる要求を持つてゐる。この要求は共同や従服に反するものではなく、自己の心的状態を推し廣めて周圍に及ぼさんとするに必要であるに過ぎない。この要求の發達したのが、實生活または文化的事業に於ける指導者たらんとする要求である。

この要求と似て非なるものは虛榮心や自負心に基く自慢の要求である。

## 乙 複雑なる社會的心理作用

### 第一章 體 制

一 個人と社會精神 社會心理學の問題は第一に如何にして現實なる社會的集團が組織されるか、第二に如何にしてこれらの組織が活動するか、の二點に限られてゐる。即ち社會の構造および發達がその中心問題である。しかし注意すべきは、以上に於て論じた種々の社會的機能が社會的集團に入り來る唯一の活動でないことである。社會的集團の生活に於ては、個人的差異や相互の關係や服従や自己主張以上になほ他の要素が含まれてゐる。個人の生活は非社會的世界に向ふと共に必然的に全體としての集團の中に包含されてゐる。従つて集合體が複雑なる形式をとつて發達



する場合には、個人的心理作用を含むと共に嚴密な社會的心理作用をも含むのである。これと同時に注意すべきは、個人的精神と同様に、社會そのものの精神の存することである。これは單なる比喩ではなくして實際に立證することのできる比喩である。個人的意識に於ては、感覺が要素となり、表象聯合によつてそれが結合され、促進乃至抑制の作用によつて或ひは上に立ち或ひは下になつて組織されるのであるが、社會的精神に於てもまたこれと同様に多くの個人がその要素であり、個人の接近および交通によつてそれが結合され、服從乃至自己主張によつて或ひは上に立ち或ひは下になつて、一定の組織をつくるものである。個人的精神に於ける人格の統一性は、社會的方面に於ては社會的集團の統一性である。

更にまた個人的精神に於ても社會的精神に於ても同様に心的作用に對する生理學的基礎が存する。個人に於て腦髓細胞の活動が心的要素の基礎となり、且つ互ひに求心的並びに遠心的神経系統によつて結合されてゐる如く、社會に於ても個人の腦髓全體がその生理的基礎となり、且つ多くの腦髓は、社會の求心的並びに遠心的部

分を通して互ひに結合されてゐる。個人の腦髓に於て細胞間に相互關係が行はれる如く、社會に於ても各個人の間相互關係が存在する。

以上の如き類似點に加へて尙次に述べる二つの點を考慮する必要がある。第一に個人的精神に於ける要素の相互關係を理解するには、種々の精神物理學的作用の間に存する直接の關係を考察するのみならず、腦髓細胞の中に傾向として保存される要素を理解せねばならぬ。換言すれば個人に於けるすべての心的活動は心的要素の相互關係にのみ存するのではなく、精神物理學的作用によつて經驗の結果造られ保存された腦髓細胞の共同的活動に俟つことが多い。これと同様の作用は社會に於てもまた存在する。例へば手紙や新聞紙や書物の如きは全然個人以外に存在するものであるが、しかも多數の人々の間に相互作用を起すことは否定されぬ。それは細胞の活動が二つの神経を結合するのと同様である。第二に個人的精神に於ては腦髓細胞の相互關係のみならず、腦髓の精神物理學的機能が外的活動の出發點たることを理解せねばならぬ。これと同様の作用は社會的集團に於ける種々の産物に於てもま



た認めることができる。社會的集團に於ける種々の産物は社會的制度の形をとつて現はれる。數萬の個人は互ひに協力して制度として組織された文明を産出するのである。行政や法律の制度、經濟や工業の制度などは、すべて社會的精神の活動から生れるものである。そしてこれらの制度に於て起るすべての變化は社會的集團そのものに影響を及ぼすのである。否吾人の活動説の立場を徹底するならば、かかる制度の産物そのものがその生産者を變化すること、恰も運動系統の衝動がその源たる感覺系統を變化させると同様であると言はねばならぬ。

二 不隨意的結合 個人間の内的相互關係から生じた種々の社會的體制は極めて複雑な關係を有するもので簡単に分析することはできない。しかし大體の區別をすると不隨意的なものゝ隨意的なもの、一時間なものゝ永續的なもの、それに屬する各員が空間的に直接交渉あるものと間接に交渉あるもの、または個人的關係によつて結ばれたものと客觀的社會的制度によつて支配されたものの如き對立を見出すことができる。また少數者によつて指導される場合と、その體制に屬する各員が同じ

標準に立つ場合とを區別することができる。かくして社會的體制を大別することができるが、各個人はただ一つの團體に屬するのみならず多くの團體に同時に屬することができる。家族の一員であると共に國家の一員であり、黨派の一員であり、職業團體の一員であることが出来る。

以上の如き區別の中で最も根本的なものは不隨意的結合と隨意的結合とである。不隨意的結合とは、各個人が特に努力して實現したものでなく自然に出來上つた體制を意味する。例へばシベリアの流竄者達が一つの社會的結合をなす如き、或ひは電車に乗り合せた乗客の如き、一時的ではあるがすべてこの種類に屬するのである。このほか劇場に於ける觀客、講演の聽衆などその例が少くない。これらの場合に於ては暗示性が強く活らいて摸倣性を強める。一人の拍手が滿場の拍手を誘致するが如き場合が多い。その他民族や家族の如きは同じく不隨意的體制であつて、そこには挑發的共同的活動よりも寧ろそれに屬する各個人を團結して生存させるが如き永續的感化が活らいてゐる。これに對して隨意的結合に於ては、常に組織的に計劃を



立てて新しき運動を起し新しき侵略を企てる。二人の異國人が會話を始めて次第に理解し終ひに共同して或る事業を企てるが如き、子供らが集つて勝負事をする如きこの例である。前に劇場の観客は不随意集合であると言つたが、聴衆全體を俳優との關係に於て見るとそこに隨意的體制が現はれる。観客は俳優に對して或る要求を持ち、俳優も観客に對して或る期待を持つのである。更に複雑な工場組織より三人の共同事業に至るまですべてこの隨意的體制であつて、そこには服従や自己主張や摸倣や個人的差異やその他あらゆる作用が含まれてゐるのである。否すべての偉大な文化的事業に於てはかかる隨意的結合が缺くべからざるものである。それに於ては隨意的結合と不隨意的結合とが互ひに相俟つて一つの統一ある發展を遂げるのである。

## 第二章 業 績

一 生物學的方面 前章に於て論じた社會的體制はそれ自身社會的發達の目的ではなく社會的活動を助ける手段であるに過ぎない。個人に於ける感覺作用が行動に關係することによつて生物學的に有效なものになると同様に、社會的集團に於ても種々の社會的業績を環境に適合させて行くところに生物學的に見て有用な意義が存するのである。この點から見て最も重要な區別は、社會的集團に常態のものと變態のものがあることである。個人に於ける變態的心理状態が第一には心理的要素の破壊から起り、第二には心的要素相互間の誤れる作用に基き、第三には腺から生ずる有毒分子によつて外的に生ぜしめられることを論じた。この三つの原因はまた社會的集團に於ても存するのであつて、社會に於ける少數分子が墮落するところから社會的機能に障礙を來すこともあり、社會の各員相互の反目から腐敗することもあり、また外部から輸入された危険思想や惡習慣の如き外的影響によつて滅ぼされることもある。かくして世界には常態の社會的集團が存すると共に、變態的な集團が生れるのである。



二 材料および方法 正確な材料を得るには産業や道徳や政治などの統計によらねばならぬが、これと同時に社會的集團に加はる各個人を内觀によつて分析して得ることもできる。この種類の材料は例へば投票や投票前の議論などから生ずる心的集合などの如き、或ひは噂の擴がり方や、話の移り行きなどによつて實際的に研究することができる。最近よく行はれるのは數百或ひは數千の人々に質問書を送つて、その回答によつて研究する質問紙法の如きものがある。更にこれに加へて歴史に現はれた言語や傳説の發達、法律や文學や教會や都會などに基く種々の研究などは、すべて社會的集團に於ける心的作用を教へるのである。

三 社會的業績の諸相 すべての社會的集團の目的は新しき業績を造り出すにあるが、この創造的機能には同化作用が先だつて準備することもあり、また後に加はつて助けることもある。社會的集團は常にその組織を持続せしめる傳説を吸収し、習慣を明らかに意識し、自己の意義および使命について確固たる信念を持たねばならぬ。このことは最も基本的集團たる國家に於て最もよく現はれてゐると共に、家

族の如き小なる集團やクラブの如き表面的な集團に於てもその基礎となるのは業績を造らんとする同化作用に外ならない。勿論分業を必要とする如き大なる集團に於ては、この同化作用は集團そのものの活動から孤立して行く。例へば學校やその他の國家的事業は國家の機能の準備として同化作用を營み、日曜學校の如きは社會の同化作用を代表するのである。かかる同化作用は種々の手段を執るものであるが、それが極めて一方に偏ると書物や繪畫や建築の如きものに於て現はれる場合がある。吾人は今日プラトンと同じ心的集團に入るがために、彼の對話篇を讀んで彼の理想主義を同化するのである。

個人的精神に於ける感覺的結合が運動となつて現はれる如く、社會的精神の組織は新しき社會的影響および産物となつて現はれる。少人數でも集團をなして勝負に耽ることがあり、議論の結末をつけることがある。この場合の享樂や理性による一致は組織的な心的交通の産物である。かかる産物はその集團が永續的である場合に有意義となる。家族的集團に於て兩親が子供の知徳を涵養するが如きは最も有意義



な業績である。これと共にその集團が増大すると益々有意義になる場合がある。しかし社會的集團に於て最も意義ある業績は、政治、經濟、宗教、學問、藝術、職業などの方面に於て現はれる。國家の軍備や監獄制度の如きもこの意味の有意義なる業績である。

集團の發達の程度が高い場合にはそれに屬する或る個人が指導者としての位置をとつてゐる。殊に近世の政治や工業や藝術や學問に於ては指導者の位置が高い。しかし社會心理學の立場から考へるとかかる個人は同時にその時代の產物であり、その社會的集團の一部分である。一世を劃する革新の如きも社會的意識から極く僅かよりはなれてゐない。偉大な發明家の如きは何よりも先づ摸倣者であり、彼の業績もまた彼の呼吸する時代の文明の中に含まれた實である。カント、ゲエテ、ベートーヴェンの如き天才者は彼等の時代の脈搏に一つの力を與へたのである。

しかしながら文明の活動はその業績を以て終らない。文明に於ける業績はそれ自身新らしい社會組織に對する刺戟となり、時代の推移と共に絶えず新らしい活動を生

んで行くのである。歴史の流れはかくして常に作用と反作用の因果的な無限の系列である。社會はかくして絶えず進歩し發展して止まぬのである。



## 第二編 目的心理學

### 第一部 目的心理學の原理

#### 第一章 直接の實在

一 二つの心理學 以上第一編に於て吾人は心的生活の種々の要素を記述し説明し、更にそれらの要素よりなる各個人が社會的集團に於て存在する状態を一貫した因果の見方によつて研究した。しかし或る人はそれをもつて満足せず、例へば解釋の作用や理解作用の如きは因果關係によつて説明され得ず、従つて全然異なる方法によつて研究されねばならぬと考へてゐる。かくして一方に於て因果關係を研究する心理學と、他面に於て意味を研究する心理學との二つが提出される。しかし吾人はかかる連絡なき二様の心理學を以て満足できない。心理學はそれが學問である限り

に於て一つの體系をなさねばならぬ。心理學の目的とする心的作用の説明は、要するに發見でなくして要求である。假に因果關係によつて説明され得ないものがあるとしても、それを因果關係の世界から棄てることは説明の原理に忠實なる所以ではない。茲に於て吾人はかかる二つの心理學を有する代りに、一つの心理學に於ける二つの立場を許さねばならぬ。もともと心理學の出發點は上に述べた如く心的生活の説明である。その説明に當つて吾人は先づ因果關係に基く研究を試みた。即ち第一編に於て論じた如く、最も單純な心的要素から、最も複雑な社會的現象に至るまで悉く因果關係に基いて説明したのである。茲に於て同一の對象を異なる見地から眺める必要が起つてくる。既に緒論に於て述べた如く吾人はかくして心的生活の意味を理解する立場を得るのである。

因果的心理學に於けると同一の對象を意味の方面から理解せんとする試みは、本論に於て論ずる目的心理學である。これは自然界に對して物理的説明と宗教的説明とが併立し得る如き關係に於て成立するのではない。自然界に關する學的研究は物



理學以外にあり得ない。しかし心的生活に關しては二つの見方が同時に肯定され得るのである。この意味に於て目的心理學は因果的心理學と同様に具體的事實の徹底的研究および分析的研究に基くのであつて、宗教の如く信仰や想像や直観などによつて導かれるものではない。これを要するに目的心理學は因果的心理學と同一の對象を持ち同一の態度によつて研究されるのであつて、ただ見方が異なるに過ぎない。

二 因果的心理學と實在 茲に於て吾人は生活なる實在に對する二つの見方の間の關係を立ち入つて吟味する必要がある。既に論じた如く因果的心理學の研究は吾人の生活に知覺や記憶や執意などがあつてこれらのものが意識内容として知覺されると論ずるのであるが、吾人の直接經驗は果してかかるものを示すに過ぎぬであらうか。吾人がこれらの知覺や執意などを意識内容として論ずる時には、既に生活そのものが本質的に造りかへられるのではないか。かくして因果的心理學の假定を吟味せんとするならば、先づ知覺や表象の如きものと、感情や内的活動の如きものとを區別せねばならぬ。

吾人が部屋を見、景色を眺めるとき吾人はそれらの對象を表象として意識の中に所有すると云ふ。また過去に於て見た山を記憶する場合にはその表象を再現すると言ふ。かくして外界に存するすべてのものを單なる意識内容として考へることは、外界の實在を甚だしく改造するのである。否更に第二の種類の活動に至つては、寧ろこれ以上に革命的な感を與へるであらう。吾人は因果的心理學の立場から感情や執意やその他の心的状態や活動などを恰かも客觀的に觀察し得るものであるかの如く論ずる。吾人が活動する時には活動そのものを經驗するのであつて、活動を吾人の經驗から切り離して觀察することはできない。他人の内的生活について語る場合もまた同様である。しかし實生活に於ては吾人は他人の内的生活を理解するに當つても、先づその意味や目的を考へて全體として理解するのである。他人の經驗も自己の經驗と同様に直接なる主觀的表現として理解するのである。即ち他人の心的生活を理解するのは、單なる認識ではなくして承認である。他人が新聞を讀んでゐるのを見るときにも吾人は彼の手にある新聞と言ふ物體を認識し彼が意識する表象を



眺めるのではなく、直ちに彼の立場に立つて彼の経験をそのままに経験せんとするのである。

三 科學的改造　かくして客觀的に觀察して生きた内的生活を改造することも、若し思想の目的に適ふならば不當なことではない。科學者は寫眞師ではない。物理學者が経験に於て與へられぬアトムの如きものを以て自然界を説明するのはもとより實在の改造であるが、しかしこの種類の改造は學問的要求の當然の結果として承認すべきである。これと同様の權利は心理學者にも屬する。もしそれが學問的要求に適ふものであるならば、内的生活に於ける直接経験の世界をふみ出るのが當然である。

四 目的による理解　既に目的論的見解を承認するならば、吾人の研究の對象は意識内容ではなくして外界に散漫せるものであり、吾人の人格は知覺されるものではなく活動しつゝあるものである。他人は意識の對象ではなく承認すべきものである。存在するものすべてを理解すべきで記述されるべきではない。すべては目的と

の關係に於て理解されるべきで、説明されるべきものではあり得ない。種々の生活活動は腦髓作用によつて結ばれてゐるのではなく、それらの中に存する内的關係によつて結ばれてゐるのである。かくして原因を問ふ根據がない以上吾人は自由である。因果の世界に於ては原因と結果とが方程式によつて現はされるが、自由や意味の世界に於ては無限の創造、無限の向上が存するのみである。前者に於てはものの善惡がなく、後者に於ては評價され得る目的が中心となり、すべての活動は目的なる理想を標準として量定されるのである。この二つの立場は一見すると矛盾するが如く思はれるが、實際經驗に照して考へると輕卒にこの二つを同一視することはできない。日常生活に於ては吾人は常にこの二つの見方に頼つてゐる。教師は教室に於て學生を自由な人格とし意味の中心として考へると共に、意志や記憶力や衛生状態の如き機械的方面をも忘れてはならぬ。吾人は自己を目的ある人格と考へてあらゆる思想や氣分や思考や判斷などに責任を持つと共に、遺傳的性質や境遇の感化のために特殊な表象や氣分などが表象聯合によつて起つたことも認めねばならぬ。吾人は



自由であると同時に環境によつて束縛されてゐる。しかしそれは吾人の精神の一部が自由であつて他の部分が束縛されてゐると言ふ意味ではない。吾人は徹底的に自由であると同時に徹底的に束縛されてゐるのである。吾人が自己の生活を體得するならば世界は吾人にとつて自由なる活動の對象であり、意味を有し目的を有するものである。しかもこれと同時に吾人の生活を説明するならば、吾人の精神は原因から生じた結果であり、すべての意志活動は過去の心的作用によつて規定されてゐるのである。この二つの態度の中いづれを執るかは吾人の思想の目的によつて定まるのである。そして以上の如き二つの傾向を徹底して體系化すると、茲に心理學の二つの體系が成立する。即ち因果的心理學と目的的心理學である。かくして成立の動機から考へるならば、この兩者は相俟つて一つの眞理を明らかにするものであり、同一の生活の二方面を説明するものであり、従つて根本に於て何ら相反するものではないことが明らかになる。

最後に一言注意すべきは二つの心理學體系が共に眞ではあるが、同じ地盤の上に

立つて共同的に活らくものでないことである。一は人間を客體として扱ひ、他は主體として扱ふのである。通俗なる非學問的思想は先づ外界に於ける客觀的存在に注目してすべてをこれから演繹せんとし、哲學的思索は寧ろそれと正反對の道を辿つて主觀に溯らうとする。しかし吾人は内的生活を先づ第一に目的論的行爲として理解すると同時に、それが客觀的に存在し活動することを認める。かくして主觀的實在の構造が吾人の有する目的の原因たるのではなくして、吾人の有する目的そのものが吾人の目的ある活動を變化して因果的構造となすのである。主觀の活らさが先づ最初にあつてしかしてのち對象の因果關係が生ずる。吾人の心的生活は自由である。そしてこの自由なる行爲によつて吾人はこの生活を全然自由なき機能的なものと考へるやうになるのである。



一 目的行爲と因果律 因果的心理學の原理を論ずるに當つて吾人は種々の心的作用を因果的に關係させ、内的生活の全體を因果律によつて説明せんとした。そのために吾人は心的作用を腦髓作用と因果的に結合させ、それによつて目的が完全に實現されることを明らかにした。心的現象と身體の活動との間に存するかかる關係は、目的心理學の研究に當つても中心問題である。しかしこの場合には内的生活を意味として理解するが故に結合される材料が異り、従つて結合の問題も異つてくる。因果的心理學に於て扱ふ意識内容は對象であるが、目的心理學の材料をなす行爲は主觀に屬する行爲である。それゆゑ單に研究の材料から論ずるならば、因果的心理學は意識内に存する心的對象を扱ひ、目的心理學は主觀によつて實現される行爲を論ずるのである。

單獨なる行爲を理解すること、換言すればその意味を捉へ自我の目的的表現を知ることが生活することであつて科學ではない。しかも吾人の生活はこれに止まらずかかる理解力を超越する。吾人が自己乃至友人の思想や感情や意志などを理解する

時は、吾人は單なる理解といふ行爲以上に出るのである。思想を理解せんとするならばその根柢に横はるその人の人生觀の如きものに觸れ、行爲であるならば性格をも考へるのである。すなはち吾人は理解の對象を單獨にとり出してあらゆる他の關係をはなれてそのみを理解するのではなく、同時に人格に於て存する他の行爲と關聯させて、常に有機的關係に於て理解せんとするのである。日常生活に於けるかかる關係は表面的であることもあらうが、いづれにしても眞の理解は單獨なる行爲に對するものではなく、目的を有するこの世界に於て他の實在と關係させるところに意味が見出されるのである。因果的心理學に於ては斷片的な個々の説明から心的生活全體の統一的因果關係説明にまで及ぶ如く、目的心理學に於ても個々の目的行爲の表面的斷片的結合から、精神生活全體の要素の中に存する統一的關係を明らかにするに至るのである。

かくしてあらゆる内的目的行爲の完全なる關係を明らかにするがためには、因果的心理學の立場に陥らぬやうに注意せねばならぬ。吾人の經驗する内的生活は原因



結果の關係に於て現はれるのではない。然るに通俗の議論に於ては身體の運動の原因が意志であるといふが如き因果的説明が屢々行はれる。しかしこれはもとより重大な誤解である。吾人が實際に經驗する具體的意志そのものは、發動機の如きものではなく、それ自身に於て完結せる一つの活動である。もともと意志の如きものを因果關係によつて説明するのは自然科学的心理學の發達の結果であつて、それは吾人の直接經驗する意志とは全然異つたものである。それ自身意志し従つて意味を有する意志そのものは、かかる因果關係に基く意志と全然異なるものである。勿論吾人は意志を遂行して自然界に或る變化を及ぼすことがある。しかしそこに因果關係があると論ずるのは自然界の變化に内面的解釋を企てることであつて、自然そのものを因果的に説明する所以ではない。若し強ひてそこに因果關係を認めんとするならば自然を人間の如きものとして考へねばならぬであらう。風や波の如きものが生きたものとなり、それらの運動はそれらの中に屬する意志の表現となるであらう。しかしかかる詩的乃至神話的人格化は自然科学にとつて全然無意味である。

一つの行爲として理解された眞の意志は吾人の經驗に於ては原因でもなくまた結果でもない。それを他の實在と關係せしめる時にも因果關係によることはできない。かくするならば心的生活は終ひに身體の行動に從屬するものとなるであらう。因果律そのものは吾人の内的活動から造り出された法則であつて、活動そのものがその法則に從屬するのではない。例へば電氣を變じて磁石とするが如く、心的作用を變じて自體の活動とすることは無謀である。吾人の研究の對象はかくして生きた心的作用である。しかし單なる心的作用そのものは科學的研究によつて抽象されたものであつて、その中に眞の内的生命が宿らない。吾人の研究の終局の目的であり、且つそれ自身價値を有する内的生活は、主觀の表現として理解されると共に意味を有するものである。因果律によつて煩はされぬこの根本的具體的な價値ある實在にとつては、客觀的記述や説明は全然無効とならざるを得ない。

二 目的行爲と時間 目的心理學の材料を更に詳しく説明するには、主觀の表現たる内的生活行爲が物理的時間の中に含まれないことを指摘せねばならぬ。若し時



間を嚴密に物理學的意味に解するならば、心的世界は無時間的であると主張することが出来る。勿論吾人の心的生活は生れてから死ぬまでの時期に限られてゐる。數日の間思索に耽ることもあり、一夜眠れぬために恐怖心の起ることもあり、感覺と反應との間の時間を實驗によつて計算することも出来る。しかしこれらの場合の心的經驗は物理的時間の中に存する物理的身體に依屬した心的作用として扱はれてゐるのである。かかる因果的心理學の對象としての心的作用は勿論時間の中に存在してゐる。しかし吾人の思想や執意の行動を理解するに當つては、それが時間や空間の如き外的状態によつて束縛されてゐるか否かは全然問題とならない。吾人がこれらの行爲を認識するのはその行爲が何らかの意味を有するが故であつて、それが繼續する時間の如きは後からそれにつけ加へて考へられたものである。

これと同時に吾人の行爲は、客觀的時間と全然無關係ではなく密接に關係してゐる。吾人の意志の對象となるものは現在に於て存在する。吾人の行爲の對象とならぬものは既に過去のものである。かくして行爲の對象は常に時間的關係を有してゐるが、時間そのものは吾人の行爲が造り出すものであつて、行爲の外に客觀的に存在してゐる行爲がそれに從屬するが如きものではない。否吾人は一つの行爲と外界に於ける變化とが同時に起つたとさへ言ふことができない。行爲は外界の變化と同時的ではなく、先行するのではなく、又それにつづいて起るものでもない。行爲そのものは因果律の外にあると共に時間の範圍外にあるのである。勿論吾人の行爲の中には進歩があり、一つの行爲から他の行爲が生れ、従つて目的の立場から見た別個の時間を有すると云ふことはできるが、その時間は決して外界に存在して曆となつて現はれる如き時間ではない。

三 目的行爲の連絡 二つの經驗の間に必然的な結合の關係を見出すのは、何を目的としてであるか。このことを明らかにするために吾人は物理的世界に於ける場合を回顧する必要がある。物理的世界に於ては一つの作用が單に規則正しく前後して起るといふ事實だけでは究極の理解に到達したと言ふことはできない。たとへば回の中九十九回まで同一の前後關係が現はれてもそれが必然的であると結論するこ



とはできない。物理学の目的とする科学的説明から考へると、すべての原子が失はれずに存続する如き機械的、自然を構成することがその究極の目的である。あらゆる変化は原子の位置の変化に基き、不滅なるエネルギーによつて作用されねばならぬ。この假定に到達するとき自然現象の前後關係が必然的に結合され得るのである。かくして因果の連がりは何ら共通なき二つの現象を合せるのではなく、あらゆる變化を通じて存続する實體およびエネルギーの現はれとして理解されるのである。この場合の實體およびエネルギーはそれ以上立ち入つた説明を要せざる根本假定であつて、この假定に於て含まれる同一律によつて因果律が基礎づけられるのである。さて目的および意味を基礎とする吾人の實生活の中に存する必然的結合關係も、物理学に於けると同一の動機をもつて研究され、同一の結果に到達するのである。この場合に於ける動機も種々多様な現象に秩序を與へ、個々の經驗に基礎を與へ正しき觀察をするにある。これと同時にかくして到達された結果は、現はれた變化を同一律に基く一つの體系として承認し乃至改造することにある。あらゆる變化を

通じて存続するものはそれ以上結合される必要がない。かくして吾人の目的心理學は動機に於ても結論に於ても物理学と同一であるが、その内容に至つては全然異なるのである。即ち後者の場合には繼起する時間を通じて存続する原子的實體の同一性が主張され、前者の場合には内的經驗の發達を通じて存続する意志目的の同一性が承認されるのである。

意味の連續性を理解するためには對象の連續性を根本的に棄てなければならぬ。心理學的意識内容として扱はれた對象としての意志は、吾人がこれを知覺するときには既に消え去つて、次の瞬間に起る新しき意志活動は全然新しき内容を持つのである。しかしこの場合にも全然同一なるものとして残るのは意志の目的である。前提を肯定する意志は結論を肯定する意志と同一である。前者は後者を含み且つ意味する。この両者は同一なるが故に目的の世界に於て結合されてゐる。例へば三角形の定義に含まれた意味とそれに基づく幾何學の推理とは心理學的觀察の對象としては全然異つてゐるが、意味を理解すると共に定義から命題に進み行く主觀の二つの行爲



は意味の統一性によつて結合されるのである。

物理的世界に於て一つの作用は後に向つてその原因と關聯すると共に前に向つて結果と關聯するのであるが、意味の世界に於てもまた意味に二つの方面がある。前に向つてはそれが回轉し行く他の意味と關聯し、後に向つてはそれが生れたものとの意味と關聯する。自然現象の場合には時として原因に注目し時として結果に注目するのであるが、意味の生活に於ても吾人の興味は時として前提に注目し時として結論に注目するのである。しかもこの兩方面は共に組織的に理解されねばならぬ。茲に於て起る問題は、自己に於けるすべての行爲が他の行爲と同一なることを理解するため、自我そのものを如何に考ふべきかである。

この問題に移る前に一言注意せねばならぬのは、すべての意味が自我を離れぬことと關聯して、數學的眞理の如きものでさへその反證とならぬことである。數學に於て例へば三三が九と言ふ場合にはその活らきは特殊な個人の目的行爲を豫想せずして成立するが如く思はれるであらう。しかし實際に於てこの場合にはすべての理

性的存在者を豫想してゐる。萬人悉く承認することを豫想せずしては數學的眞理の立言は不可能である。即ちこの場合には超個人的自我が豫想されてゐるのである。

四 靈魂の機能 吾人が自我を理解するに當つては、自我のすべての行爲を同一のものとして解さねばならぬ。その結果例へば物理學者が自然を觀察するに當つてエーテルの如きものを認めざるを得ない如く、吾人もまた實際の經驗を越えて、靈魂に到達せねばならぬ。靈魂とは他人の行爲並びに外界の對象に反應して、自己の内に潜在せる行爲を具體的經驗として回轉すると同時に、常に自己の同一性を保つが如き目的の體系として考へられた自我に外ならない。

自發的活動を有する目的ある靈魂の思想は人間の内的生活に關する思想と等しく古くから存在してゐたのであつて、その後歴史の變遷と共に種々の形式に於て考へられて來た。殊に靈魂を不滅なる單純な實體と解する思想は可なり長く行はれてゐた。しかしどの時期に於ても忘れられなかつたのは、靈魂の目的ある自由なる活動であつた。しかし徹底した目的心理學の主張者は、この靈魂なる實體を昔からの思



想によつて理解してゐる。殊に哲學者は思索の結果、吾人の活動が自由であるのはその原因が靈魂の中に存するからであると考えてゐる。しかし目的心理學の立場を徹底させるならば、靈魂そのものを因果の系列に導き入れることは誤りである。靈魂は解釋され理解されるべきであつて、假令原因が靈魂の中に存するとしても原因から説明されるべきではない。記述化することは對象化することを意味する。しかも吾人の目的の體系そのものは對象として理解され得ないのである。

これと同時に靈魂を身體の運動の原因と見ることとも全然誤りである。かくすることは理解するべき靈魂に説明のメスを振ふことである。もとより心理學的な腦髓作用は筋肉を動かす。しかし目的の世界に於ては、靈魂の生命は身體の運動に於て現はれながらそれが如何にして現はれるかを全然示さないのである。人と會話する時にも相手が觀察の對象ではなくして、吾人と人間的な關係を有する場合には相手の一舉一動が相手の靈魂の活動を吾人に語るのである。吾人はまた一つの靈魂が如何にして他の靈魂の活動の原因たるかを問ふ權利がない。友人の抱く目的に對して吾

人はそれを知るか知らぬかの何れかである。しかしそれを知つた場合に如何にして彼の靈魂活動が自分の靈魂に入來つたかは全然不必要な問題である。「如何にして」を問ふのは因果的心理學の問題である。

然らば如何にして現實なる靈魂の特色を示すことが出来るか。それは因果的でもなく、それ自體に於て存するのでもなく、物理的時間に於て存するのでもなく、實體でもなく、また對象でもない。積極的に規定するならば靈魂はあらゆる經驗を通じて自己と同一なるものである。しかし吾人は靈魂の目的が單に微分子の如く活らくと思つてはならぬ。一つの行爲に於ける靈魂と他の行爲に於ける靈魂とが同一であることを決定するのは第三者ではない。同一性は意味の統一である。行爲の一體系が行爲の他の體系を意味するのである。主觀は一つの目的を意志すると共に他の目的を意志する。かくして種々の目的を定立しつつ、しかもその主觀の同一なる點に靈魂の同一性が存する。靈魂はかくして連續的なものである。しかも靈魂はすべての新しき行爲に於て自己自身の新しき體系を立てるが故に、自己を對象とするが



如きものではなく常に自己意識を保つものである。のみならず空間や因果律の世界に於ける生物學的な死の現象は目的の世界に到達せざるが故に靈魂は不滅である。かくの如き靈魂の生命を分析しその内的關係を辿るのは目的心理學の研究である。これは人類の究極の目的に到達するものである。何故ならば眞理や美や道德性などに對する超個人的責任に關聯するのは、因果的心理作用ではなくして靈魂そのものの行爲なるが故である。最後にこの靈魂こそすべての個人を包攝する絶対的精神の一部分として承認されねばならぬ。しかし吾人は先づ最初の仕事として靈魂の個々の機能を明らかにせねばならぬ。因果の世界に於ては個々の部分を心的作用と稱んだが、目的の世界に於ては主觀と對象の對立なきが故に作用の如きものは存しない。吾人は寧ろ經驗について論ずべきである。次に吾人はこれまでの講義の形式に従つて、個人的と社會的の二部に分けて靈魂の個々の經驗を論じたいと思ふ。

## 第二部 個人的經驗

### 第一章 意味

一 實生活に於ける意味 直接經驗および靈魂に關する以上の如き議論を一見すると、目的を有する精神なるものが極めて漠然とした架空のものと思はれ易いであらう。因果的心理學に論じられる精神が極めて具體的な實際的なものであるに反して、腦髓作用の連絡さへなき目的行爲なるものは眞の經驗の外にあつて直觀にのみよつて到達される精神的エネルギーの如きものであると思はれ易いであらう。しかしそれは全然誤解である。吾人並びに他人に於ける目的行爲ほど吾人の實生活に密接な關係を持ち、且つ現實なものはないのである。現に實生活に於てはその現在に決して疑はれることはない。卑近な例をとると朝起きて隣の人が「お早う」と言ふ



と、「如何ですか」と返事をする。吾人がその場合彼乃至自分の意識内容について考へる以前既に彼の言葉にもまた自分の言葉にも意味が含まれてゐる。或ひは日常の新聞紙上では瑣細な市井の出来事や、政黨の成り行きなどに關する項目があつて、人々の思想や判断を知ることが出来るが、これらのものはそれらの事柄を経験する個人にとつて意味を有するのであつて、意識内容としてそこに記されたのではない。それらの材料は先づ解釋され次に鑑賞されたり批評されたりするのであるが、それは感覺の複合物として記されるものでもなく、腦髓作用によつて説明されるものでもない。小説家が主として興味を有するものこの方面の内的生活である。小説家の描く人物は科學的現象としてではなく、吾人が實際その人物の生活に入つて眼前に髣髴し得るが如きものとして描かれるのである。小説に扱はれる男女間の戀愛の感情の如きも、因果的心理學の研究者には縁遠いものである。詩人の描く戀愛は靈魂の目的行爲である。演劇に含まれた心理學的眞理を語る文藝批評家の如きも、心理學的記述や説明に於ける如き正確さを考へるのではない。人物の性格に明らかなき

生きとした表現を與へるのである。これを要するに自我の意味としての心的生活は直接にしてまた最も人間的な材料である。

二 問題および方法 以上の如き目的に基く理解が最も直接にしてまた最も自然的な經驗であるのみならず、同時に人間を観察する最も意義ある方法であることは既に論じたところである。人間を主觀として認め人間の意味を理解することは、因果的心理學のなす如く人間を對象として觀察するよりも遙かに重要なことである。

昔は人間の精神を全然哲學の立場から研究し、靈魂の性質を研究の對象としてゐた。人間の表象、情緒、行動などを個人に於ける根本的活動とせず、寧ろ論理學、倫理學、美學、形而上學などの立場から研究した。然るに個々の精神現象に關する研究が新らしく起つた當時は、自然科學がその頂點に達してゐたのでその方法を採用した。即ち精神を因果關係の立場から考察し、その説明に當つて種々の實驗が行はれた。かくして精神そのものに關する立ち入つた研究が全然放棄され、殊に思想や判断や統覺などの研究に於ては、次第に行爲の内的意味や目的關係の問題にまで觸れ



ざるを得なかつた。しかしかかる因果律の立場に立つてこれらの問題に論及するとは甚しき混亂に陥る惧れがある。しかし實際に於ては必ずしもかかる混亂に陥らなかつた。實驗および比較による方法を助けとして周到な研究をすることは、同時に心的生活の目的方向に貢献することになるのである。即ち因果的心理學の終極の點がやがて新しき心理學の出發點となり、因果的心理學に於けると同様の特殊な事實が靈魂の目的行動の研究に際してもまた現はれるのである。勿論今日のところは目的心理學の扱ふ事實を具體的に概説することさへ困難である。それゆゑ吾人はそれらの個々の内容に立入らず、それに於て扱はれる問題並びにこれに伴ふ意義を考へるに止めたい。

因果的心理學が心的要素から表象聯合や反射運動を経て社會に於ける各個人の關係に及ぶ如く、目的心理學もまた要素から出立して文化生活の全體を築き上げねばならぬ。しかし目的心理學に於ける要素は勿論感覺ではない。自我の經驗を構成するものは意味として考へられた好惡の行爲であり、肯定乃至否定の行爲、撰擇乃至

回避の行爲、または信仰乃至不信仰の行爲であつてそれ以上に分割され得ない行爲である。茲に於て吾人はこれらのものがどの程度まで互ひに關聯し、且つ如何なる心的状態がそれらから生れるかを明らかにせねばならぬ。この場合に言ふ結合乃至創造は勿論全然目的に基くものでなくてはならぬ。一つの行爲はそれの有する意味によつて他の行爲と結合され、また多くの行爲は更に廣き意味を有する新しき行爲に於て内的に結合されて始めて創造するのである。かくしてあらゆる單獨な行爲の分析および區別、あらゆる内的關係の種々相、あらゆる種類の新しき創造形式——これらのものが個人的靈魂心理學の内容をなすのである。そこから更に進んで種々の自我の間に存する内的な社會的目的關係の問題が起つて来る。目的心理學に於ける社會的方面は、因果的心理學に於けるよりも遙かに重大な意義を有する。個人の社會的關係は因果の見地から考へると寧ろ第二義的であつて最も重要なのは寧ろ個人的研究であるが、目的心理學の立場から考へると一個人が他の個人に對する關係の方が遙かに重大な意義を有する。目的を有する人間は何よりも先づ目的を有する



社會の一員である。人と人との内的關係を心理學的に分析するには自我を理解する行爲から始めねばならず、従つて歴史的並びに文化的社會を構成する實際の關係を研究せねばならぬ。そして最後に個人の實現する理想的行爲を研究するに當つて、その個人と共に眞善美なる妥當の世界の建設を理想とする人々の全團體と關聯して考察せねばならぬ。

三 反對の豫想 第一になすべきことは行爲そのものの性質を明らかにすることである。勿論吾人は行爲を對象として論ずることはできないが、消極的に行爲を單なる意識内容と對照して考へるならば、行爲は常にその對象を豫想するが、意識内容には對象が豫想されない。この區別は、結局は主觀と客觀の區別である。因果的心理學の範圍内で考へると、最高音から最低音に至る系列の如き場合にその兩端を對立させて考へることはできるが、しかし最高音そのものの中に最低音に對する對立が含まれてゐると考へることはできない。感情の場合に於てもまた同様である。最も強い快感と最も強い不快感との間の系列を考へても、その中間には快でも不快

でもない中性的感情が存するのであつて、それを經て他へ移ることは必ずしもその兩端をそれ自身對立的であると考へる理由にならない。意識内容としての快と不快とが對立的でないのは、暖と寒とが對立的でないと同様である。否更に心的現象として考へられた執意の如きも、單に吾人が意識する現實の事實であつて、それ以上に他の對立的執意を意味するものではない。願望や傾向の如きも單に存在する心的状態であつてそれ自身對立的ではない。腦髓の運動系統に二つの相反する傾向があつて、その一つを刺戟すると共に他を抑制する場合に於ても、内的對立が存すると考へることはできない。

これに反して吾人は目的行爲に於てはそれと對立する目的の否定を意味せざるが如き行爲を想像することができない。嫌惡の情の如きも心的現象としては青色や綠色と同様にそれ自身完結せるものであるが、行爲としてはそれは常に愛好の情に對抗するのである。嫌惡の情と愛好の情との間には常に争闘が行はれる。一つの判断を肯定する場合にも吾人はそれを否定することに反對し、或ひは否定判断の場合に



はその内容を承認することを拒むと共にその肯定に向ふのである。愛は憎みを封じ、憎みは愛を滅ぼすのである。勿論一人の人に對して愛と憎みの感情を同時に向けることはあるが、この場合には吾人はその人の或る一面を愛し他の一面を憎むのである。これと同時に或る目的を意志すると同時に、意志しなかつた如き複雑微妙な状態を感じることがあるが、この場合にも吾人の意志とその反對とは同一の目的に向つてゐるのではない。同一の目的から考へると吾人は意志することと意志しないこととの中間にさまよふこともあらうが、吾人が實際意志する行為に於ては吾人はそれを意志しないことに反對し、また意志しない行為に於ては意志することに反對する。かくして目的心理學の材料に於ける根本的特色は、常に反對に對する内面的對立關係である。

四 同一性の肯定 吾人の行為の特色は更に經驗に於ける二つの對象間に同一性の關係を認めるにあると言ふことができる。従つて行為の造り出す結合關係は自我と對象との間の關係ではない。目的そのものを外部に見出すのではなくして對象を

關係させる行為そのものに於て吾人は自我を認識するのである。行為することが即ち自我であり、自我は行為に於て自己の實在性を見出すのである。この意味に於て行為は自我を構成するものであると共に、二つの對象間に同一性の關係を與へるものである。

先づ最も單純な知覺の場合について考へると、知覺が想像作用の如きものと異なるのは、後者に於て吾人の個人的對象が獨立なる外界と關聯せざるに反して、前者即ち知覺の行為に於ては一個の個體として與へられた對象と外界に屬する對象との間に同一性の關係を見出すにある。すなはち知覺に於ては吾人の心的生活に與へられる個人的人格的對象と超個人的超人格的實在との間の關係をつくるのであり、この意味に於てそれは一つの信念である。記憶作用に於ては吾人の眼前に存する對象と過去に於ける現實なる對象との間に同一性の關係をつくり出すのである。また吾人の概念に於ては先づ最初知覺され記憶され乃至想像された實在に於て存する本質的要素と言語との間に同一性を見出し、判斷に於ては言語と對象に於ける關係との間



に同様の關係を造る。更にまた願望や執意や快不快の感情や注意作用などに於ても、作用の中に同一性の原理が保たれてゐる。ただ茲に注意すべきは以上の場合に於て對象が意識内容として存するのではなく、また對象と靈魂との一致を豫想するのではないことである。

吾人の行爲に於ては二つの對象間の同一が立てられる。その二つの對象は異なる内容を示すのであるが、しかもその間に同一性のあることを吾人の靈魂は認めるのである。吾人が或る景色を記憶する場合、その景色の表象そのものは目的を有する靈魂の内容として存するものではない。吾人の理解する表象としての形式と、過去に於て實現した客觀的景色との同一性を認めるのである。判斷に於ても判斷の對象たるものと、それに應ずる客觀的實在との同一を主張するのであつて、客觀的實在そのものが判斷の内容とされることを意味しない。かかる作用あるが故に靈魂は同時にその反對を考へ、目的をもつて活動する性質を帯びるのである。勿論かかる同一性の認識は因果的心理學に於ても認められるのであるが、因果的心理學に於てはこ

の活らさを身體の運動に基き感覺を伴ふ方面から研究して行く。然るに目的心理學に於てはこの内的關係は既に豫定されてゐるのである。二つのものを一つにする力が即ち意志であると考へられてゐる。單に同一性を肯定することそのことが即ち靈魂の行爲である。

## 第二章 創造

一 目的的分析 目的心理學の最初の仕事は錯綜せる目的生活をその要素たる個の行爲に分析することである。この目的行爲は自然科学の研究に馴れた人々には極めて抽象的に考へられるかも知れぬが、實際に於てそれは吾人に最も近い具體的經驗である。しかしかくして人格を分解してそれを獨立なる目的行爲に歸着せしめることは内的生活を理解するに當つて充分であるとは云へない。人格の經驗は連絡なき個々の要素の集合ではない。個人の根底に横はる最も深奥なる意義は寧ろ個々



の行爲が他の行爲と連絡して靈魂の各機能の間に關係を造るところに存する。一つの行爲にとつてそれが他の行爲と同一の意味を有することを肯定するならば、この肯定そのものは同一性を定める新しき行爲である。世間的活動を望む積極的要求と隠退して慰めを得る消極的要求とが實際生活に於て經濟上の成功を望む欲望の中に含まれてゐる。かくして種々の行爲が一つの人格の活動として連絡を持つ例は更に學問的研究に於ても現はれてゐる。殊に單獨な事實から一般的敘述に至る場合、或ひは一般的敘述から特殊な判斷に及ぶ場合に吾人はこれらの種々の行爲の同一性を肯定するのである。目的心理學の範圍に於て自己意識と稱ばれる經驗はすべて種々の行爲の間に同一性を認める能力に過ぎない。自我の同一性は行爲の外に横はる或るものではなくして多くの行爲の間の内的關係の中に存するのである。二つの行爲の同一性を肯定する行爲はそれら二つの行爲を結合すると同時に自我の統一性を定立するのである。それゆゑ吾人の自我に於ける有目的統一性の認識は、凡ての思考乃至執意の發展の中に含まれてゐる。かるが故に、自己意識は靈魂の觀念と區別さ

れねばならぬ。既に述べた如く靈魂は個人の具體的行爲に於て實現される潜在的行爲の體系である。これは心理學の立場から理論的な證明の假定として認められたものである。然るに自我は之に反して具體的經驗そのものの機能に於て存する統一性に外ならぬ。

二 意志の自由 靈魂の行爲に於ける目的關係は内的經驗を結合するのみならずこれを更に自由なる創造の手段として使ふのである。従つて創造は自由と密接なる關係を有するもので、これに反して心的構造の機械的方面は自由でないと同時に何ものをも創造し得ないのである。

先づ自由の問題から論ずると、これは既に因果的心理學のところでも述べた如く因果律の例外ではなく寧ろ心的因果關係の一つの立場として見らるべきものであるがこれと共に吾人は目的心理學の立場に立つて自由の概念を明らかにすることができ。この目的心理學の立場に於ては自由なる行爲とは精神物理學的組織のあらゆる部分が、規則正しき協力の結果として生ずるものである。それ故この組織が擾され



て連絡が破れる場合には、その個人は決断の自由を失ふのである。狂人や酔人や催眠術にかかつた人などはこの例である。この場合個々の行爲が行爲者そのものから出るか否かは問題ではなく、精神物理學的組織が活らく時に障礙の起るのが行爲の自由を缺く所以である。この意味に於ける自由は吾人の眞の目的生活に意味と價値を與へる自由と何らの關係もない。吾人が思想や決意や感情や信仰に於て自由に行爲するものであることを知るのは、必ずしもそれらの源として腦髓作用のあることを豫想しない。吾人が經驗するがままの生活を考へるならば、自由なる行爲が自由であるのはそこに原因なきが故である。即ち腦髓の作用から因果的必然的に生ずるものではなくして、吾人は個々の自由なる行爲に對して自己の責任を感ずるのである。この意味に於て初めて責任の觀念が明らかになつてくる。

しかし勿論、例へば犯罪人の如きは全然精神物理學的機械的立場から考へて、彼の行爲を懲戒し將來に對して改善させるがために投獄することを是認される場合があるであらう。因果的心理學の立場からは犯罪人の所謂自由行爲なるものも彼の精

神系統に生れながら存する傾向や環境の感化などに基くと考へられ、それらを矯正するのが裁判所の目的であると考へられるであらう。しかし目的心理學の立場から考へるならば人間の行爲はそれ自身に於て完結せるものであつて、その行爲を決定する原因に溯る必要がない。すべての行爲は第三者にとつてはその意味を理解することを要求し、その行爲を經驗する人にとつてはこの意味を忠實に守るやうに決定させるものである。行爲は他人に對して訴へるものであると同時に自己の立場に於て承認するものである。それゆゑ目的行爲に對して自由を認めるにしても、その行爲の原因が餘りに複雑微妙であると云ふが如き立場からこれを認めることはできない。原因がありながらそれが餘りに複雑にして不明なるが故に自由なりと主張するが如きは吾人の採らぬ所である。目的行爲は既に論じた如く他の行爲とこそ連絡すれ、決して精神物理學的變化によつて支配されるものではない。かくしてそれ自身に於て精神物理學的精神を有せざる目的行爲は、同時に何らの影響をも殘さぬものである。例へば指で書物を開く運動の如きは、指の運動がそれに先だつ神經系統の



影響乃至結果ではなくして意志の表現である。勿論この場合の指の運動を因果的心理學の立場から考察し得ることは言ふまでもないが、嚴密なる目的心理學の立場に於てはその運動を單に意志の表現とし目的行爲の目的として論ぜねばならぬのである。

三 創造力 目的に基き意味を有する吾人の行爲は以上の如く何らの影響を残さぬものであるが、これと共にそれは内的結果を伴はざるを得ない。多くの目的行爲が一つの全體として内的關係を保つ時にはそれは個々の行爲の總和ではなくて全然新しき或るものである。即ち創造力である。吾人の全内的生活は絶えずより豊富な行爲を創造しつつあるのである。因果的世界に於て最も根本的なものはエネルギー保存の法則であるが、目的を有する吾人の靈魂の世界に於て絶えず増大し行くのは意味である。僅かの命題から宏汎な理論をつくり、單純なる感情の色合から美しい文學の作品が作られ、生きた實際上の決斷から複雑極まりなき計劃を遂行するが如き場合に於て、吾人は全然新しき意味に基き創造を成就するのである。表象、記

憶、知識、興味の如きが一つに集つて茲に新しき藝術品の如きものが生み出されるのである。

吾人の全生活はかかる意味に於ける不斷の創造である。フイヒテよりショーペンハワーに至る近世哲學の根底に流れる自我乃至意志そのものの創造的發展の思想は要するにこの眞理を述べたものであつて、自然主義やプラグマティズムや實在論や新實在論の如き種々の立場は要するに眞理の一面を捉へたに過ぎず、根本の眞理は實にかの理想主義の哲學によつて最も明らかに認識されたのである。茲に於て論ずる自由の問題はもとより哲學上の問題とされるが、同時に自然科学的因果的心理學に於ても亦種々の問題を伴つてゐる。しかし吾人が眞にかかる生理學的影響のもとに立つ因果的考察を棄てずして、しかも自由の觀念に新しき解釋を與へんとするならば吾人は以上論じた如く因果的心理學に於て認められる精神をそのままに一つの目的を有する統一體として考察し、それに於て見出される意味の創造に眞の自由を認めざるを得ないのである。



## 第三部 社會的經驗

### 第一章 實際的關係

一 理解 靈魂と靈魂との間を結ぶ最も基礎的な社會的關係は理解の行爲である。吾人はこれを一人の人間から他人へ傳はる傳達の方面から因果的に考察せずして、目的心理學の立場から考察するのである。ところでこの理解作用には二つの要素がある。即ち他人が實現する行爲に對してその充分な意味を體得しつつそれと同一の行爲を實現すること、そして第二にはかかる吾人の行爲を他人の自我に關聯させることである。他人の靈魂なるものは要するにかかる意味に於ける行爲が內的に關係した一つの組織であるに過ぎない。他人の行爲を理解するに當つては勿論、彼の身體の立場に立つて外界を考察せねばならぬ。種々の感官や筋肉を有する他人

の身體に必然的に伴ふ時間や空間は、彼が一定の態度をとつて事物を撰擇する場合の條件となるのである。かかる條件のもとに於て行はれた種々の態度なるものは、純粹にその目的を考へるならば吾人の人格をなすものに外ならぬことが明らかである。それ故彼の行爲を理解しその行爲に伴ふ意味を知る場合には吾人は既に相手の人の立場に立つのであつて、他人が吾人の對象となるものでもなく、また他人の機能が因果關係によつて解釋されるが如き機械的結合でないことが明らかである。かくして眞に他人を理解するならば、他人の生活に於ける態度はもとより吾人と異つてゐるが、そこに用ひられる材料は獨特のものである。他人をつくりあげる世界は外界の一斷片ではなくして吾人が目的行爲に於て始めて理解する獨立な純粹なる世界である。吾人は他人の快苦、記憶、思想、計劃、決斷、行爲などを例へば外界の物體を知覺するが如き態度をもつて眺めるのではなく、彼の立場に立つて始めて理解するのである。

以上の如く吾人が各自に有する態度と共に他人に及んで行く態度がある。この二



この態度の中に同一の關係があることを或ひは肯定し或ひは否定して、兩者の上に立つ新しき目的に基く生活の構造を造るときは、吾人の内的經驗は益々複雑なものとなる。そして茲に於て起るのは他人の感情に對する同情乃至同情の缺乏であり、他人の思想に對する同意乃至不同意であり、また他人の決斷を或ひは喜んで受入れ或ひは拒むが如き種々の心的行爲である。これより更に進んで感謝、嫉み、憎惡、憐憫、恐怖、社會的名譽心、謙遜、信賴、不信任、愛、嫌惡の如き種々の態度はすべてかかる根本的行爲に基くのである。

二 解釋 他人を理解するところから起る目的行爲として擧ぐべきものは解釋である。それは他人の目的行爲の中に含まれた意味を展開することを目的とする。子供が泣くときの感情の如きは容易く理解することができよう。しかし子供が自分の考へを言ひ現はすが如き場合には、一步進んで何らかの解釋を試みることが必要である。更に政治家の思想や文學に於ける詩の如きものに於ては解釋の必要が多である。解釋が理解と異なるのは前者が個人の行爲から全然離れて如何なる人にも知

らるべき表現の意味を展開する點に存する。例へば辯護士が法律を解釋する場合、或ひは言語學者が文學の作品を作者から離れて解釋するが如きはその例である。殊に科學的研究に於ては種々の法則はその發見者と全然關係なく解釋されるのである。

三 社交 理解および意味の心理學は更に一步進んで實生活に於ける社交や協かや論戰などの場合に至ると更に複雑化してくる。かかる社會的交際に於ては意志と意志とが觸れ、目的と目的とが結ばれ、主觀と主觀とが或ひは助け合ひ、或ひは妨げ合ふのである。勿論複雑な實生活に於ては他人が無理を通すときに服従するが如く人格と人格とが目的に基いて結合せず寧ろ因果的關係を結ぶ場合があるが、實生活の大部分は取引所の賣手と買手の關係や、學校に於ける教師と生徒の關係の如く、根本的には主觀と主觀との獨立の交渉に基くものである。更にまた商業の取引や、授業時間や、法廷の訊問や、政治乃至宗教上の集合などに關するすべての記録は吾人の理解および解釋の方面から充分に説明されるのであつて、因果的心理學の携さはり得ないものである。かるが故に歴史家の如きは常に目的心理學に極めて接



近してくる。歴史的發展に於ける根本精神的は因果關係によつて説明さるべきものではなくして、常に理解され解釋さるべき生きたものである。數千萬或ひは數億の人類が歴史に於て絶えず實現し開展する文化の諸相は、目的心理學の見地をはなれては到底理解され得ないのである。

## 第二章 理想的關係

一 理想的的目的 吾人の靈魂は常に外界から印象を受けてそれによつて變化するが如き受動的な存在ではなく、常に自己を肯定し、主張し、擴張すると共に絶えず他の靈魂と接觸し、これによつて新しき意味を獲得し行く活動的創造力である。屢々用ひられる『力への意志』なる語は最もよくその意味を傳へるものである。靈魂はかくして常に價值あるものを追求する。一人の人の求める價值が他人の求める價值と一致するとき彼はそこに満足を見出すのである。しかし吾人の個人的生活の要求

を満足させる價值が吾人の求める唯一の價值ではない。吾人が價值ある目的行爲を爲しつつかもそれを自己の行爲として感ぜざるが如きものもある。個々の人間に關するものではなく、苟くも主觀と稱せらるべきあらゆる主觀に屬する價值がある。かかる行爲に於ては吾人は自己がその主體でありながらしかもその行爲の中に個性を現はさぬのである。吾人は常にかかる超個人的理想的目的に向つて活動しつつある。そしてその限りに於て各個人相互の理解および認識の社會が生れ、全人類を通じて共通に存在する精神的社會がつくられるのである。若しかかる精神的共同の世界に參與することを拒む人があるならば、彼は人生を夢幻の如く考へる人でなくてはならぬ。苟くも他人と共通の世界を所有し、他人を理解せんと欲し、また他人に自己の主觀を理解されんと欲するならば、吾人は萬人に共通なるかかる世界を築きあげその根底として存する理想的目的行爲を是認せねばならぬ。かかる行爲に於て存する價值は、本質的に超個人的絶對的にして永遠なる價值である。そして價值は眞、美、道德(善)および宗教(聖)なる四つの形をとつて現はれるのである。換言



すれば論理的價值、美的價值、倫理的價值および形而上學的價值なる四つの種類が存在する。

二 規範的行爲 かかる四つの價值を要求する行爲は、快樂や安全の如き個人的價值を求め行爲と等しく吾人の行爲である。しかもその根底は後者と全然異つてゐる。かかる價值を求め行爲は理想的目的に奉仕するものであり、従つてこれらの目的行爲は單なる個人的行爲の上に位するものである。即ち規範である。それは意志してもしなくてもよいやうなものではない。苟くも全人類に共通の世界に參與せんとするならば、如何にしても意志せざるを得ざるが如き行爲である。換言すれば吾人の義務であり責務である。吾人はかかる超個人的標準によつて個人を測定するのである。例へば生命に係はるが如き危険に瀕してゐる人に逢ふとき吾人の意志は彼の生命を救はふとする。この場合の意志は勿論個人の意志である。しかもそれは救はざるを得ない必然性を有する限り、單なる個人的要求から生れるものではない。自己の目的のために救ふことを意志するのではない。自己の意志であると同時に

に超個人的當爲の要求即ち規範意識である。

理性の方面に於ても同様であつて、吾人は眞理を求めて正しき眞なる判断を肯定する。Kantが6であることを肯定する時には、Kantの10と言ふが如き他の式を否定せねばならぬ。即ち後の式を肯定する人があるならばそれを拒まねばならぬ。それ故眞理とは要するに萬人が個人的感情を離れて承認するが如き判断に外ならない。ギリシヤのソフィストは「人が萬物の尺度である」と論じて眞理の相對性を主張したが、かかる皮相の實用主義は既にソクラテスによつて論駁された。すべての眞理が相對的であるといふ主張は結極自家撞着である。何故ならばその主張そのものが既に相對的であり得ず、従つて如何に眞理の絕對性を否定せんとしても、否定そのものが終ひに少くとも一つの絕對的眞理を意味するからである。このことは更に藝術の世界に於ても同様である。美の觀賞には、個人的快苦の感情が伴ふが、美そのものはそれによつて毫も害はれない。ベートーヴェンの音樂にも、ゲーテの詩にも萬人の承認すべき普遍的絕對的美の宿ることを認めざるを得ないのである。かくし



て目的心理學の立場から個人的靈魂の中に二つの異なる活動を認めることが出来る。すなはち個人的行爲と規範的行爲である。吾人は後者を除いて前者のみを論ずることとはできない。しかも後者すなはち規範的行爲を分析して研究することは、心理學の範圍を脱して哲學に入ることである。

附  
言  
This is the

## 附 言

緒論に於て述べた如く、ミュンスターベルと教授の計劃によれば、因果的心理學および目的心理學なる二つの研究を一つに統一すべき第三の領分は應用心理學である。應用心理學に屬する重なる分科は教育心理學、法律心理學、經濟心理學、醫學的心理學、文化的心理學の如きものであるが、これらの詳細な點に至つてはまだ充分な研究が遂げられてゐない。従つてこの方面の研究は極めて重要なものであるに係はらず、今日に於ては尙未だ混沌とした未開の處女地であつて、これを組織的に論ずることは極めて困難である。のみならずこの方面の研究は心理學としては餘りに専門的に互るのであるから、吾人の概論としては寧ろ省略するのが適當であらう。奥々も忘れてはならぬのは心理學に於ける二つの方法がそれ自身極めて相反するにもかかはらず、心理學の究極の目的を實現するために到底一をとつて他を棄てるこ



とのできぬものであることである。最後に研究者の便宜のために、本講義に於て用ひた術語を表にして英語と對照しよう。

心  
理  
學  
終



*darkness*  
*Taisho 15 year*  
*June 21th.*  
*30th. invent*

# 術語對照表

## 了 行

暗 黑	darkness
暗 示	suggestion
壓 覺	pressure sensation
意 味	meaning
印 象	impressions
意 識	consciousness
意 志	will
因果的心理學	causal psychology
一般表象	general ideas
醫學的心理學	medical psychology
運動感覺	kinesthetic sensations
音 差	difference-tones
音 程	interval

## 力 行

快 感	pleasure
感 覺	sensation



感情の膨脹	expansion of feeling
解釋	interpretation
可變性	modifiability
間接觀察	indirect observation
活動	action
學習	learnig
概念	concept
翫賞	enjoyment
記憶	memory
禁壓	suppression
緊張	tension
氣質	temperament
期待	expectation
機能的心理學	functional psychology
規範意識	norm consciousness
協働	cooperation
強度	intensity
競爭	rivalry
業績	achievement

技巧	technique
苦痛	pain
缺陷	defectives
血管	blood-vessels
血緣	kinship
結合	union
幻覺	hallucination
個人的差異	individual difference
個人心理學	individual psychology
行動	behavior
行爲	act
興奮	eccitement
構成的心理學	structural psychology
光覺	light sensation
光度(鮮明度)	brightness
悟性	understanding
	<b>廿 行</b>
再認	recognition
再現	reproduction



催眠術	hypnotism
錯覺	illusion
差異	difference
殘影	after-effect
殘像	after-image
雜音	noises
視覺	visual sensation
視覺刺激	optical stimulation
色彩	colours
色盲	colour blindness
識阈	threshold of consciousness
刺激	stimulation
神經衰弱	neurasthenia
神經系統	nervous system
執意(意志活動)	valition
習慣	habit
質問紙法	questionnaire method
心像	image
集團	group

集群	constellation
衝動	impulse
社會的事象	social events
社會心理學	social psychology
社會精神	social mind
自動運動	automatic movement
自己觀察	self-observation
自己表現	self-expression
自己意識	self-consciousness
自己主張	self-assertion
人格	personality
實體鏡	stereoscope
從屬關係	subordination
上音	overtone
常態	normal state
持續	duration
隨意的活動	voluntary action
精神檢查	mental test
精神物理學	psychophysics



精神技術學	psychotechnics
精神分析	psycho-analysis
性 格	character
性 向	disposition
責 任	responsibility
脊 髓	spinal cord
說 明	explanation
腺	glands
生理學	physiology
齊一性	uniformity
測 定	measurement
相 稱	symmetry
創 造	creation
組織(體制)	organization
想 像	imagination
相互關係	correlation
夕 行	
單純性	simplicity
多血質	sanguine temperament

膽汁質	choleric temperament
對 比	contrast
知 覺	perception
知 能	intelligence
知 力	intellect
知 識	knowledge
直接性	immediacy
注 意	• attention
聽 覺	auditory sense
調子(音の)	pitch
低意識(副意識)	subconsciousness
抵 抗	resistance
傳 達	communication
統 一	unity
統 覺	apperception
同 情	sympathy
同一性	identity, sameness
動 機	motive



内省(内観)	introspection
内 包	depth
内部刺戟	internal
二重人格	double personality
音色(ねいろ)	timbre
粘液質	phlegmatic temperament

ハ 行

潑瀾性	vividness
灰 色	gray
把 住	retention
犯罪心理學	criminal psychology
判 斷	judgment
白 痴	idiocy
反 對	opposites
反射運動(反應)	reaction
反 覆	repetition
比較觀察	comparative observation
ヒステリー	hysteria
疲 勞	fatigue

被暗示性	suggestibility
病理學	pathology
複重人格	multiple personality
不 快	displeasure
不滅性	immortality
服 從	submission
輻 輳	convergence
文化的心理學	cultural psychology
表象(觀念)	ideas
表 出	expression
平行論	parallelism
變態心理學	abnormal psychology
本 能	instinct
飽和度	saturation
補 色	complementary colour

マ 行

身 振	gestures
夢遊病者	somnambulist
無意識的	unconscious



明晰	clearness
網膜	retina
模倣	imitation
目的行爲	purposive act

ヤ 行

憂鬱性	melancholic temperament
融合	fusion
夢	dream
優生學	eugenics
豫知	anticipation
抑制作用	inhibition

ラ 行

リズム	rhythm
類似性	similarity
冷點	cold spots
聯合	association

—(以上)—



大正十五年六月十八日印刷  
大正十五年六月三十日發行

(非賣品)

版權  
所有

綜合大學講座  
第十卷  
心理學

東京市芝區白金三光町二五七番地

編輯者 小西榮三郎

東京市牛込區柳町二十一番地

印刷者 田中末吉

東京市芝區白金三光町二五七番地

發行所

聖山閣

振替東京四四三六五番  
電話高輪七〇五八番

理想社印刷



## 編輯後記

◇第二回配本として、河合先生の『心理學』を發行致します。講師の御都合により、原稿の先に出來たものから以下順次發行し、必ずしも講座の卷數には依らぬ事と致しますから、何卒左様御承知願ひます。

◇第一卷配本以來『是非とも臨時入會を許して貰ひたい』といふ申込や問合せが盛んに参りますが、目下、二百名位までは直ちに配本する餘裕がありますから、若し諸士の知友にして入會御希望の方がありましたら、此際至急御申込下さるやうお勸め願ひます。

**會** 一ヶ月金二圓(送料十二錢) 三ヶ月金五圓七十錢(送料卅六錢)  
**費** 半年分金十一圓(送料七十二錢) 一年分金二十一圓(送料一圓四十四錢)

◇尙、今後御入會の方は送金の際『臨時入會申込』と明記して下さい。從來の會員は御送金の際『會費第何回分』と明記して下さい。

『綜合大學講座』編輯部

會員各位



548  
56



終